



東京暮らし四十年から山里に
 浜松市の北にある山里、から
 やってまいりました。ここから
 五十キロ離れています。クルマで
 一時間半かかります。春野町は十
 年前に浜松と合併しました。かな
 りの過疎地です。人口は五十年代
 の人口の三分の一。この十年で二
 割以上も減っています。廃校は二

平成29年度
 研 修 会

お寺と人々をつなぐ
 『きつかけ』づくり

NPO法人衆舎代表

池 谷

啓氏

時／平成二十九年十一月二十一日(火)
 於／ホテルグランパレス浜松

つありました。かつて栄えた林業
 やお茶もふるいません。軒並み、
 店も閉じています。出会う人のほ
 とんどは高齢者です。

そんな山里に移住したのは、七
 年前。四十年間、東京暮らしをし
 ていました。けれども、このまま
 ずっと東京暮らしでは息が詰まる。
 これ以上、東京にいても、お金ば
 かりかかって晩年はたいへんにな
 りそう……。

ということで、田舎暮らしを思
 いました。フリーランスで編
 集の仕事をしていたので、会社に
 通う必要はありません。田舎を
 ベースにして、ときどきインドや
 バリ島に出かけて、のんびり暮ら
 そうと思ったのです。

さて田舎といっても、どこがい
 のか……。まったくアテがあり

ません。やはり適度に都会に近い
 ほうがいい。山があつて温泉があ
 る。海にも近いほうがいい。雪は
 降らない所がいい。そんな思いで
 適当に探していました。

まずは、八ヶ岳のふもとのあた
 り、信州の安曇野。温暖で海も温
 泉もある西伊豆、千葉の房総など。
 みんないいところです。でも残念
 ながら、どこの物件も高額で手が
 出ません。

「春野町」というひらめき

そんなとき、「そうだ。浜松の
 山奥がいいかもしれない」とひら
 めきました。「春野町ってどうだ
 ろう。名前がいい。山の中だし清
 流もある」。ということで、探し
 たわけです。

なんとか手がでる価格帯でした。

フリーダイヤル 0120-86-2779

仏壇・位牌・寺院用具・仏教美術品

ぬしや仏具店



浜松市浜北区貴布祢504-7 www.nushiya.net

ぬしや工房

お仏壇・ご本尊・仏具・家具調度品の塗替え、修復
 お見積もり無料 ご一報ください

土地付きの家は、敷地が千七百坪もありました。栗の木も五十本あります。あまり先のこと考えずにきめました。五十七歳のときです。

はじめての山里暮らしは、おもしろいことばかりでした。焚き火、ドラム缶風呂、石窯でピザを焼いたり、炭焼き窯をつくったり、家でコンサートを開いたり。そんなことを楽しんでおりました。でも、草刈りはたいへん、鹿や猪もでる。集落との付き合いも都会のようにはいかない。いろいろとたいへんということが、あとからわかってくるわけですね……。

田舎に住むなら、田んぼもやってみてみたい。お米作りに挑戦しました。山里は高齢のために耕作放棄地がたくさんあります。そこを借りて、仲間と無農薬の田んぼを始めました。どうせやるなら無農薬栽培、そして天日干しがいい。雑草対策は、鴨に食べてもらうというアイガモ農法もやりました。六百キロくらいのお米はとれました。しかし、収穫に至るまで手間は

かかります。沢から水を引く、田んぼの水漏れを防ぐなど土木作業もあります。トラクターや脱穀機など、機械もいる。出費ばかりがあつて、とても収益はあがりません。なにより気力・体力がいります。こういうことは、三年やってみて、身にしみてわかることでした。農業というのは、自分には難しい。とても収益は上がりつこないなあ。ということ、いまは田んぼや畑もしていますが、メインはやはり編集の仕事ということになりました。

仏教書と医学書の編集の仕事

本業は出版の仕事なので、山里でもできるわけです。出版社とのやりとりは、電話とメール。印刷製本などは、ネットで手配します。韓国や南インド、青森県などで印刷してもらったこともありました。主に仏教書と医学書をつくっています。医学書は、たとえば「鍼灸療法技術ガイド」、理学療法や作業療法など医学の教科書の編集です。仏教書のほうは、お坊さん

や宗教評論家などの本。お寺の寺報づくりとか。

いい企画が浮かぶと出版社に企画提案します。「いいね、出しましょう」ということになる、原稿執筆、あるいはインタビュールして原稿にします。

けれども、いまは本が売れない時代で、ラクではありません。たまには、ヒットすることもありますが。この本（『死んだらおしまい、ではなかった』PHP社）は、十五万部も売れました。

二千件もの葬儀を経験したお坊さんの実話です。葬儀を重ねるうちに、亡くなった人の存在を感じていきます。その内容を一つひとつ記録していったものです。

死んでも「無にはならない」「本人」というものは死んでも「ある」。葬儀の本質は、遺族が故人を偲ぶところにある。遺族の心こそが故人に伝わる。そのために、お坊さんはお経をよみ、場の空気を整え、遺族の心を鎮める、と。そんな内容です。この本は、東北大震災の

後に、口コミで少しずつ売れていききました。

それから、アメリカからの流れで、いま「マインドフルネス」という言葉が広まっています。じつはブツダの瞑想こそが、マインドフルネス。ヴィパッサナー（心を観じる）である。そうした南方仏教の本もつくらせてもらいました。こちらは六万部が売れました。

また、吉野の修験道の本山、金峯山寺の本尊である蔵王権現の本、奈良の信貴山の本尊である毘沙門天の本。両親の供養のために思いをまとめたものを出したい、というお坊さんの本も作らせてもらいました。

山里への定住促進の事業

ところで、「池谷が田舎に越したという。どんな所か見てやろう」と東京の友人たちが訪ねてきました。あちこち案内すると、「こんな田舎に暮らしてみたい」と言います。山里は空き家が多いです。うちの犬の散歩に歩く範囲だけで



も三十軒くらいはあります。まあ、貸してくれるかどうかは、難しいのですが。「そうだ、こうした空き家を田舎暮らししたい人につないでいけばいい。山里にも活気が出る」。そう思いました。

東京だとアパートの家賃は十万円くらいします。それでは、家賃のために働くというようなことになりません。山里に暮らせば、数千円で空き家が借りられたり、タダでもいい、なんてところもある。家賃分は働く必要がなくなりません。

時間が生まれます。その分は、木工をやったり田んぼをやったり、創作活動をすればいい。フェイスクックなどを活用すれば、山里にいても、全国、世界に友人はできます。

なにより山里は、自然の豊かな資源の宝庫です。耕作放棄地、山林、放置竹林、流木、お茶、たくさんあります。田んぼも、お茶も、林業もできます。そんな暮らしの提案をしていきました。

そんなところから、「春野に住んでみたい」という人たちが増えてきました。この五、六年の間に移住相談は二百件以上、十組十五人の人が移住してくれました。

人と暮らしの魅力を発信する

まあしかし、移住というのは、やはりたいへんです。空き家があるからというだけでは、移住は難しい。なにしろその土地の人の付き合いがある、集落のしきたりがある。店も診療所も少ない。保育所や学童保育もない。やはり不

便です。そのあたりの山里の魅力とたいへんさ、不便さ、どんな暮らしがあるのか、どんな人たちがいるのか、というところを発信しています。私のようなド素人が山里で田んぼをやる、大豆をつくる、ブルーベリー、栗を育てる。地域のつぎあいもある。そんな田舎暮らしの失敗例、たいへんさ、楽しさ、手応えを伝えたりしています。ポイントとは、山里で暮らし人たちの生き方を伝えること。それが、山里の魅力発信になり、まちなかとの交流促進になるのだと思っています。

そんな活動を継続してやってみようということで、NPO法人(楽舎)も立ち上げました。

山里には素敵な暮らしをしている人、達人のような方がいます。たとえば手仕事人です。地域に伝承された和紙づくり、鍛冶屋、竹細工など五十年も六十年も続けている方がおられます。山繭を飼育して織物にしている方もいます。また、間伐材を谷底から引き上

げて製材して家を二棟もつくった人、ホームセンターの材料だけで、四棟もつくったという人。天竜川の河原の石に猫を描いて生計を立てている人、気田川でカヤック遊びをおしえる人。ひょうたんを加工して美しいランプを作る人。いろいろな人がいます。都会ではなかなか出会えない人たちがばかりです。そうした人たちの魅力を伝えていこうということで、「こんなにアートフルな山里暮らし」というテーマで、まちなかでトークイベントを企画しました。さらには、山里に出かけてみませんかということで、「北遠山里めぐり」として、山里の暮らしを訪ねて、交流するという企画もしました。

まちなかの人たちは、山里に行きたいと思っても、なかなか「きっかけ」がありません。

こうした催しを通して、山里の暮らしに接する機会があれば、次から訪ねやすいものです。「行きつけの田舎」になってもらえばいい。山里の人も、まちなかから遊

びに来てくれるのはうれしい。交流が生まれます。

景色がいいというだけではなくて、そこにおもしろい人がいる、創造的な暮らしがある人と出会うことで、また山里を訪ねたくなる。こうして、点と点が結ばれるということになります。

「神社・寺カフェ」を始める

そんななかで、今度は、お寺と神社と、人々をつなげてみようと思いたちました。

浜松には五百近いお寺があります。そこには、広大な敷地があり、広い本堂があり、仏像があり、仏教の教えがあり、実践のあり方も伝えているわけです。

ところが一般の人のお寺さんとの出会いは、お葬式や法事の時以外ほとんどありません。お坊さんの暮らしぶりもみえてきません。檀家以外の方がお寺を訪ねる機会と

いうのは、とても少ない。和尚さんは、どんな人なんだろう。我が家の宗旨は、どんな教え

なんだろう。そうした思いがあつても、お寺を訪ねてみようという発想はないんですね。「なにか御用ですか」と聞かれそうだし、お寺

は敷居が高いわけです。お寺のほうでも、無目的にふらつと訪ねてこられても、やはり困ると思います。

でも、お寺がいまのままではもったいないなあと、かねがね思っていました。

そこで、人々とお寺をつなぐ「きつかけづくり」をしてみよう。お寺のほうも、一般の人とつながりたいという気持ちがあると思います。そこをつなげていけばいい、ということです。

タイトルは「神社・寺カフェ」としました。「カフェ」というのは、気軽に寄り集まるという意味で名づけました。それぞれの寺社が独自の企画、日程で行います。その日は、住職がちゃんと来訪者の応対をしてくる。訪ねる人は、アポは必要ない。費用もかからない。気兼ねなく自由に訪ねられるわけです。この企画を浜松市に提案しました。

「みんなのはままつ創造プロジェクト」という文化事業に採択していただいて、スタートすることになりました。

さまざまなお寺の企画

苦労したのは、参加してくれるお寺をさがすことです。そもそもなんのツテもないわけです。インターネットでさがしながら、いきなり電話します。なにかの営業と思われて、「けんもほろろ」ということもありましたが、でも、そのうち「それはいいね。ぜひ参加したい」というお寺も現れてきます。そこから、また次のお寺を紹介してもらいながら、すこしずつ増えていきました。

「うちの寺は見るものもない。何をやったらいいのかわからない」とも言われました。

「いや、いっぱい素材があるじゃないですか。お経を教えてもいいし、仏事法事の相談とか。縁側で語りあうだけでも、みなさん喜びますよ」と伝えました。

一般の人にとっては、お寺を訪ねて和尚と話ができるというのは、滅多にない体験ですから、嬉しいものです。また、菩提寺に聞きにくいことなど、聞きたいという人もいます。坐禅や念仏も、体験してみたいという人もいます。

というわけで、三十余の神社とお寺に参加してもらうことができました。

お寺ごとに、日にちも企画も異なります。たとえば、仏教の「実践としての行」です。木魚を叩いて念仏（法林寺）、お題目（日本山妙法寺、妙恩寺、妙雲寺、正晨寺）、護摩（長樂寺、遠州信貴山）、阿字観（頭陀寺）、坐禅会（栄林寺、玖延寺、長光寺、祥光寺、盛福寺、龍雲寺）。

さらには、奥の院の参拝と登山（秋葉寺）、お守りをつくっての祈願（妙恩寺）など。

そして「法話」です。精進料理のお話（栄林寺）、白隠禅師の軟酥の法と死後のこと（泰月院）、仏事相談（龍谷寺、龍雲寺）、地

域防災拠点としてのお寺(成金寺)、お茶を飲んだの語らい(永源寺)など。

そして、「文化的な催し」です。ステイールパンのコンサート(大昌寺)、蒔絵や土人形の展示と盆栽展(永福寺)、仏画と写経(長楽寺)。短歌・俳句・都々逸の講座(正晨寺)。棺桶に入つて死を体験する(西福寺)など。

神社では、古代の神話のデジタル紙芝居、神道式の礼法、作法(貴船神社、浜名総社、初生衣神社)。青崩峠や千三百年も続く西浦田楽の話(足神社)など。

きっかけから流れ起きる

「仏教とは」などと、とくに構えなくても、座卓を囲んでお話ししましょう、というあたりがラクだし、好評なようでした。訪ねるみなさんは、やはり自分のことを語りたいですね。聞いてもらいたい。そういう場を提供するには、お寺はもつとも適しているのかもしれません。

これをきっかけに、あるお寺では、お寺の整備や草刈りの手伝いをしたい、という人が現れるようになりまし。寄付されたオルガンでコンサートを企画したら、予想外の参加者があつた。医大でがん患者の集いの講師に来てもらいたいという話がきました。

また、こんな話もありました。妻が病で倒れてつらくて仕方がない。思いきり泣ける場所がほしい。「そうだ、寺カフェで訪ねたあのお寺にいこう」。そんなことで、毎日、本堂に通つてきて泣いていた。そんな話も聞きました。

私のやることは、「きっかけ」づくりでしかありません。お寺と人々が交流するお手伝いです。できれば、浜松だけではなく、遠州全域にも展開していきたいものです。全国でこういう動きが起これば、すばらしい。

ただ苦勞するのは、経費です。パンフレットの印刷代など、いろいろ経費もかかるので、助成金で賄うことにしました。一年目は浜松

市の文化振興課。二年目は浜松まちづくり公社、三年目は浜松市文化振興財団の助成事業に採択していただき、続けてきました。しかし、なかなか継続は難しいものです。さて来年は、どうしようかと試行錯誤しているところです。

看とりとおくりの講座

いますすめているのは、「納得のいく看とりとおくりを考えよう」という講座です。浜松市の文化事業に採択されて、春から講座と集いを開催します。

仏教はもちろんですが、他の宗教ではどうなんだろうか。キリスト教、神道、ヒンドゥー教の人にも話をしてもらいます。

親しい人の看とりおくりは、とても重大なことです。さらには、自分というものは必ず死ぬ。死を見据えていまを生きていく。自分はどういう死に方をしたいか。どうおくられたいか。そういうことを語り合う集いの場をつくつていこうと思います。

まあそのようなことで、あれこれと企画していますが、一言でいうと、「点と点を結ぶ」ということです。人と人の交流を企画しながら、おもしろいことをやらせてもらおうと思つていきます。

池谷 啓氏 略歴

(いけや けい)

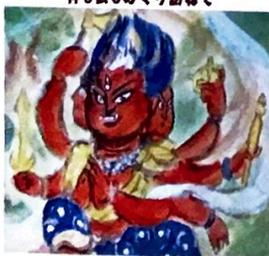


昭和二十八年生まれ。浜松市出身。早稲田大学法学部卒。NPO法人楽舎(らくしゃ)理事長。いちりん堂代表(出版社)東京暮らし四十年を経て、八年前、浜松の山里・春野町に移住。仏教書・医学書の編集をしながら、有機農業、山里への定住促進事業を行う。

お寺と人々をつなぐ「神社・寺カフェ」ネットワーク・「納得のいく看とりとおくり」講座の主幸。

神社・寺カフェ

神も仏もめぐり訪ねて



26日(土) 2/24日(土)~3/31日(土)